

# 絵本に見るインクルーシブ保育の視点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成木, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kaisei.repo.nii.ac.jp/records/2000005">https://kaisei.repo.nii.ac.jp/records/2000005</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



## 絵本に見るインクルーシブ保育の視点

成木 智子

### 1. はじめに

日本では、2000年にブックスタートという活動が始まった。ブックスタートとは、0歳児健診など親子が集まる機会に、各自治体が絵本をプレゼントし、子育てを応援する活動である。このように、乳幼児にとって絵本は常に身近にあるものといえる。乳児期であれば、保護者や保育者の膝の上で絵本の読み聞かせを聞くであろう。幼児期になり自分で文字を読めるようになれば絵本を手にして読むこともあるし、保育者の絵本の読み聞かせも引き続きあるだろう。

浅木(2023)<sup>1</sup>は、乳幼児期に伸ばす力をして5つの土台を挙げている。愛着形成、自己肯定感、認知能力・非認知能力、ユーモアのセンス。思いやりの心である。この5つを絵本から吸収していくためには、絵本のことをよく理解したおとなが必要であると述べている。絵本を親子で繰り返し共有することが愛着形成につながり、絵本を通して気持ちを伝えあえた喜びは、子どもに大きな安心感として心に残るのである。

また、乳幼児期にどうすればこの5つの土台を子どもが身に付けていくのかというと、子どもは試行錯誤しながら、体験を重ねる中で自ら主体的に体得していくと述べている。例として異年齢保育を挙げ、異年齢保育では、大きい子が小さい子のお手本となることが一つの目標となるが、こうした体験の積み重ねからひとは育つのである。毎日の絵本の中には、生きる姿のお手本についても、絵本の登場人物が数多くのことを教えてくれるのである。つまり、絵本の主人公は子どもの成長モデルなのである。

続けて浅木は、成功体験のイメージ作りとしての絵本の役割があるとも述べている。特にロングセラーを続けている絵本の読み聞かせが子どもの自己肯定感を育てるのに、無理のない方

法ではないかと主張している。絵本を読んでもらうことから子どもは聞く力を育むことや、絵本の絵を読むことから、子どもはイメージを蓄えていくこと、ことばや文章が子どもの語彙や表現力となること、ひとを思いやる気持ちや相手を理解する気持ちが育つことなどが絵本を読むことから子どもの力として育つのではないかと述べている。このように絵本は乳幼児にとって大きな影響を与えるものだと言える。

<sup>2</sup>2006年12月、国連総会において、あらゆる障害者の権利と尊厳を保障することを内容とする障害者の権利に関する条約が採択された

(日本は2014年1月批准)。インクルーシブ社会(インクルージョン)は、同条約の基本理念の一つとして挙げられている。インクルーシブ社会とは、社会を構成するすべての人は、多様な属性やニーズを持っていることを前提として、性別や人種、民族や国籍、出身地や社会的地位、障害の有無など、その持っている属性によって排除されることなく、誰もが構成員の一員として分け隔てられることなく、地域であたりまえに存在し、生活することができる社会のことをいい、インクルージョンともいう。

このように今、世界ではインクルーシブ社会を目指しているのである。乳幼児期は、人生の土台作りの時期だと言われる。その乳幼児期からインクルーシブの視点を持つことは大変重要なのではないかとと思われる。

そこで、本研究では、乳幼児期に大きな影響を与える絵本の中にインクルーシブ保育の視点がないかを調査し、考察していくことで、今後のインクルーシブ保育の実践において活用できる点について検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

数冊の絵本を考察してインクルーシブの視点があるか検討する。それぞれの絵本や作者の思いを考察していく。

## 3. 絵本の検討と考察

### (1) ディック・ブルーナの絵本

#### 『ろってちゃん』<sup>3</sup>

ボールあそびをしている3人の所に車いすに乗っている女の子(ろって)がやってきました。3人のうち2人はろってがボールあそびの仲間に入るとつまらなくなると思いました。ところが、ろってはボール投げがとても上手でした。4人でボールあそびが終わった時、一番上手いのはろってだと思いました。「ろって すごい!」「また あしたも おいでよ ぼくたち なかまになろう」ろっては「ええ いいわ」「また あした、ばい ばい。」

#### 『うさこちゃんとたれみみくん』<sup>4</sup>

うさこちゃんのクラスに新しいおとこのこが入ってきました。先生はその子の耳が違っていることを伝えました。うさこちゃんはそのこの耳を見てわかりました。片方の耳がたれていたのです。クラスのみんなはその子のことを たれみみくんと呼びました。それは本当の名前ではありません。本当の名前はだーんです。だーんは、おもしろいことを言う楽しいこでした。ある日、うさこちゃんはだーんに聞いてみました。「みんながあなたのことたれみみくんっていうのいやじゃない?」「うん、いやだよ」とだーんは答えました。「でも、ぼく もうなれているから。それにみんなが ぼくのことをしたら かわるんじゃないかな。」うさこちゃんは次の日の朝、いつもより早く学校に行きました。みんなに「これからは だーんのことを たれみみくんって よばないようにしようよ。だって、たれみみって いわれたら いやだと おもうの。だーんという なまえのほうが ずっと いいもの。」するとみんな

なが「おはよう だーん!」と言いました。うさこちゃんは とてもうれしくなりました。

#### 『うさこちゃんとに一なちゃん』<sup>5</sup>

うさこちゃんは遠い外国に友達がいました。に一なちゃんと言います。に一なちゃんとうさこちゃんは庭で一緒にボールあそびをしました。「あなたの いろ、 とてもきれいね すばらしい ちゃいろね 」

### 【考察】

『ろってちゃん』では、車椅子の女の子(ろって)が登場します。車椅子なので、きつとボールあそびは上手くできないだろうと思った子どもたちがいますが、一緒にボールあそびをしてみると誰よりも「ろって」が上手かったので、また明日も遊ぼうとなります。次の『うさこちゃんとたれみみくん』では耳が垂れている「だーん」という男の子がでできます。友達は「だーん」と呼ばずに「たれみみくん」と呼びます。仲良くなったうさこちゃんは、たれみみくんと呼ばずに「だーん」と呼ぼうとみんなに働きかけます。するとみんなも「だーん」と呼ぶようになりました。『うさこちゃんとに一なちゃん』では、体の色の違う「に一なちゃん」という友達が出ていきます。うさこちゃんは「あなたのいろ とてもきれいね すばらしい ちゃいろね」と、に一なちゃんの肌の色の違いを認めます。このようにみんなと違う所がある登場人物をみんなで認めようとする所が共通しているのではないだろうか。

(2) 『ぐるんばのようちえん』<sup>6</sup>

ぐるんばは、とっても おおきなぞうです。ずっと一人で暮らしてきたので、すごく汚くてくさいいにおいもします。ぐるんばは「さみしいな さみしいな」と言って涙していました。ぐるんばはくさいので、みんな鼻を空に向けています。ぐるんばは他の象の会議で働きに出そうと決めました。ぐるんばは、みんなに洗ってもらいみちがえるほど立派になりました。そして出発しました。ビスケット屋さん、お皿作り、靴屋さん、ピアノ工場、自動車工場に次々にいきますが、うまくいきません。しばらくいくと、12人の子どもがある家に着きました。ぐるんばはピアノを弾いて歌うとひとりぼっちの子どももたくさん来ました。ぐるんばはビスケットをちぎって子どもたちにあげました。ぐるんばは幼稚園を開きました。ぐるんばは もうさみしくありません。

【考察】

『ぐるんばのようちえん』では、一人ぼっちの象がみんなの中では馴染むことがなく、働きに出ることになります。働き先はいろいろな所に行くのですが、体の大きいぐるんばは、みんなの役に立ちません。しかし、子どもがたくさんいる家で大きなピアノを弾いて子どもたちが喜んでくれます。そして、幼稚園を開きます。幼稚園にはたくさん子どもたちが来ました。

最初はみんなの中で一人ぼっちの象、ぐるんばが最後に自分が生き生きと過ごせる場所を作る話です。このように、その時や場所によって周りに違うことで責められることがあっても、自分が活かせる場所であれば、生き生きと過ごすことができることがわかるのである。

(3) 『まちがっているこ いる?』<sup>7</sup>

このなかに まちがっているこいる? だれもまちがっていないよ きたい ふくのいろがちがうだけ このなかに まちがっているこいる? だれもまちがってないよ したいあそびがちがうだけ  
みんなみんな まちがってないよ まちがってるんじゃないよ それぞれちがうだけ あなたのままではなまるだよ

【考察】

『まちがっているこいる?』では「まちがっているこいる?」と様々な場面での子どもの違いが出てきます。服の色、好きな果物、今の気分、したい遊び、マスクをする? しない? 子どもも大人も自分で選ぶ「権利」があると言い、自分で考えて選んでいい、みんな間違っていないよ、間違ってるんじゃないよ それぞれ違うだけと言っています。最後は「あなたのままではなまるだよ」で終わっています。この本は、いろいろな物や行動等の多様性を述べており、間違いではなく違っているだけとしている。

4. 作者の思い

今回紹介した絵本の中で、ディック・ブルーナ(1927~2017)は、世界中の誰もが知っているオランダの絵本作家である。1955年に『ちいさなうさこちゃん』(初版)を出版し、日本でも1963年に福音館書店から『ちいさなうさこちゃん(改訂版)』が出版されている。森本(2019)<sup>8</sup>によると『オランダでも日本でも英国でも、とにかくブルーナの絵本が出版されている国ならどこでも、あのうさぎの女の子が一番の人気者なのだ。(中略)日本でもうさこちゃんの絵本は50年以上読み継がれているのだ』という。そして『うさこちゃんの絵本ほど、小さな子どものふつうのクラスを描いているお話はないと思う。(中略)うさこちゃんの絵本には、そんな特別な出来事はほとんど出てこない。それがかえって、子どもたちの共感を呼んでい

るのではないだろうか。』と述べている。ブルーナの絵本は15.5センチ四方の正方形で、見開きページの右に挿絵を置き、その数は12枚。左のページには韻を踏んだ4行の文章が掲載されている様式である。幼い子どもでも手に取って見ることのできる様式だと言える。

このようにディック・ブルーナの絵本は日本の乳幼児期の子どもたちにとって大変親しみのある絵本であると言える。内容についても毎日の暮らしを描いている作品が多く、子どもたちにとっても共感をよびやすいものとなっていると思われる。

森本(2019)は『障碍のある人への無意識のうちの差別を描いた2006(平成18)年の『うさこちゃんとたれみみくん』も意欲作である。ブルーナは僕に、たれみみうさぎのだ一んの両耳を垂らすスケッチも描いてみたが、最終的に右耳だけ垂らすことにしたと話してくれた。「片耳だけが垂れている方が、だ一んの身になにか大変なことが起きているという感じが強くなると思ったのです」とその理由を説明している。だ一んがうさこちゃんに「学校で『たれみみくん』と呼ばれるのは嫌だけれども、もう慣れている。それに、みんながぼくのことをもっとよく知ったら、状況は変わるんじゃないかな」と静かに打ち明けられる言葉は、力強く、心を打つ。』と述べているように、乳幼児にわかるように視覚的な面も考慮して描いていることがわかる。今回紹介した『ろってちゃん』も『うさこちゃんと一なちゃん』についても、乳幼児にとって自分とは何かが違う登場人物を通して、無意識に違うことから避けたり、排除しようしたりとするのではなく、違いを認めることを求めているのではないだろうか。

『ぐるんぱのようちえん』は最初、一人ぼっちで寂しく暮らしていた所、他の象たちは、「ぐるんぱを働きにだそう」として川でぐるんぱを洗います。その後、いろいろなお店を転々としていきます。でも身体の大きいぐるんぱが作ると大きな物になってしまい、「もう、けっこう」

と言われてしまいます。ところが、12人も子どものお母さんから「子どもと遊んでやって」と頼まれたことから、ぐるんぱは才能を発揮して、幼稚園を作ることとなります。この話では、環境によって上手くいかないことがあっても、自分に合う環境がどこかにあるということを伝えているのではないだろうか。主人公のぐるんぱは、様々な仕事体験をしていきますが、どれも上手くいきません。

20頁～21頁には『ぐるんぱは、しょんぼり しょんぼり しょんぼり しょんぼり。ほんとに がっかりして びすけっととおさらと くつと ぴあのを すぼ一つかーにのせて でていきました。 また、むかしのようになみだが でそうに なりました。』とあります。しかしながら、あきらめることはありませんでした。すると、自分の才能を活かすことができる環境に出会えたのです。

つまり、何か上手くいかないことや環境下にあっても、未来を見つめて努力することの大切さを伝えているのではないだろうか。

『まちがっているこいる?』は、絵本を読み進めていくと、子どもたちはみんなと違う子を指差していくことであろう。しかしながら、後半、本当に今指差した子は間違っているのだろうかや疑問に思うようになるのではないだろうか。『子どもも大人も自分で選ぶ「権利」がある 自分で考えて選んでいい』として、インクルーシブ社会の多様性を認めて、地域であたりまえに存在し、生活することができることを伝えようとしているのではないだろうか。

## 5. 総合考察

絵本の読み聞かせについて、松岡（2017）<sup>10</sup>は『子どもに本を読んで読んでやるとき、その声を通して、物語といっしょに、さまざまなよいものが、子どもの心に流れこみます。』と述べ、絵本の読み聞かせから子どもは大人の愛情を感じ取っているという。つまり、読み聞かせは、字の読めない子どものために、子どもの代わりに大人が読むのではなく、読み聞かせという行為の中で子どもたちは大人の愛情を感じ、本を読む楽しみをより一層大きくしているのである。

松岡は『絵本の時代は、きょうの時代、心を育てる時代です。子どもが、絵本から受ける素朴な感動を、うんと大事にしてやってください。』と絵本の読み聞かせを行う大人の読み手に対して伝えているように、絵本の読み聞かせが乳幼児に果たす役割は大きいと言える。

また、松岡はすぐれた絵本については以下のように述べている。

『まず、第一は、絵が文字に至る段階であるということ。子どもたちは、絵によって、実生活での経験を確認し、整理し、それを頭の中で再現します。それを繰り返し行うことによって、徐々に、ものごとを抽象的にとらえるやり方や能力を身につけていくのだということです。』

第二に、絵本の絵は、子どもたちの知識や経験の乏しさを補い、想像力に確かな後ろだてを与えること。それによって、子どもたちは、実際の経験に代わる経験を絵本の中でし、将来、本を読む際にぜひ身につけていなければならぬ、「ものごとを絵にする力」を養っていくのだということです。』

このように絵本がものごとを抽象的にとらえるやり方や能力を身に付ける点や絵本の絵が子どもたちに想像力を与える点などがある絵本こそがすぐれた絵本ということとなる。

今回紹介したディック・ブルーナのうさこちゃんシリーズは、一見すると赤ちゃんのファーストブックのように思われる人も多いと思うが、

読み聞かせのファーストブックにもなるが、子どもたちが字を読み始めた時にも是非読んでもらいたい絵本だと言える。松岡も『この一連のうさこちゃんシリーズは、出版社からは、「子どもがはじめてであらう絵本」と銘うって出されているが、単純とはいえ、きちんとしたストーリーがあり、絵もデザイン的で洗練されており、いわゆる赤ちゃんの絵本ではない。お話というものをたのしみはじめる三、四歳から上の子どもに』と述べている通りである。

以上のように、絵本や絵本の読み聞かせには乳幼児期の子どもにとって、その発達において必要不可欠であることがわかる。その絵本を通して、インクルーシブ社会の基盤作りができるのではないだろうか。

インクルーシブ社会を形成していくには今の子どもたちが乳幼児期から、さまざまな違いや特性があることを当たり前のこととして認識していくことが必要である。現代の日本国内においても、様々な特性を持つ子どもや外国にルーツのある子どもなど以前に比べると多種多様な子どもが存在している。だからこそ、絵本の世界でもインクルーシブな視点を持つ本を読み聞かせを通して、子どもたちと楽しむ時間を持ちたいものである。

ただし、このようなインクルーシブな視点を持つ絵本を読み聞かせすることが保育者主導とにならないように注意する必要がある。子どもの生活の中で自然と絵本を手に取り、読むことができるような環境を作る必要がある。子ども自身が感じ取ることが重要だと思われる。

## 6. おわりに

絵本の読み聞かせは保育の中でほぼ毎日行われているのではないと思う。保育園やこども園であれば、0歳～5歳児クラスまで、それぞれの発達に合わせて絵本の読み聞かせを行っているであろう。幼稚園においても3～5歳児クラスにおいて同様である。今回紹介したような絵本の読み聞かせを通して、子どもたちがイン

クルーシブな視点を持てる子どもに成長してくれることを願いたい。

今回紹介した絵本は乳幼児向けのストーリーがわかりやすいものであったり、繰り返しの多かったりする絵本である。これら以外にも多様性を認める、違いを認めるような絵本は世界中にあるだろう。

保育者は、子どもたちが多様性や違いを認め、インクルーシブ社会の担い手となるような絵本も絵本の読み聞かせの際、選択肢の一つとして考えてもらいたいものである。

そして、『まちがっているこいる？』のラストシーンにある「あなたのままではなまるだよ」と子どもたち自身が思い、相手を思うような毎日を送って欲しいと願うばかりである。

最後に、無藤（2023）は『子どもが周りとながっていく。その過程の援助が保育である」とりあえず言える。それは現代において、家庭での子育てと異なる顕著な特徴を持つに至った。』と述べているように、インクルーシブな視点を持った子どもがつながっていき、いつかインクルーシブ社会が実現していくことを期待したい。

引用・参考文献

[1] 浅木尚美『絵本力—SNS 時代の子育てと保育』、ミネルヴァ書房、2023 年。

[2] インクルーシブ社会 - Wikipedia  
(<https://ja.m.wikipedia.org>、2023 年 9 月 4 日閲覧)

[3] ディック・ブルーナ『ろってちゃん』、福音館書店、2016 年。

[4] ディック・ブルーナ『うさこちゃんとたれみみくん』、福音館書店、2008 年。

[5] ディック・ブルーナ『うさこちゃんに一なちゃん』、福音館書店、2010 年。

[6] 西内ミナミ『ぐるんぱのようちえん』、福音館書店、1966 年。

[7] かわかみかか『まちがってるこいる？』independently published、2023 年。

[8] 森本俊司『ディック・ブルーナ ミッフィーと歩いた 60 年』、文春文庫、2019 年。178~181 頁。

[9] 同上、240~241 頁。

[10] 松岡享子『えほんのせかい こどものせかい』、文春文庫、2017 年。31~51、63 頁

[11] 無藤隆『つながりという視点からの幼児教育（保育）』、全国保育士養成セミナー、令和 5 年度全国保育士養成セミナー鼎談資料、2023 年。